DOUBLE MOONS

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＯＵＢＬＥ　ＭＯＯＮＳ

【Ｎコード】
Ｎ１２３７Ｍ

【作者名】
切香

【あらすじ】
日番谷冬獅郎が、自らの斬魂刀に乗っ取られた。救出しようと死神たちが動くが……？斬魂刀異聞編を下敷きにした二次小説です。捏造大目なので、ご注意を！

1. 大凶時

氷輪丸は、ふと目を開けて辺りを見回した。
ジジ……と音を立てて行灯の中の油が燃え、炎が静かに揺れている。
隊首室の床も、白い壁も天井も全て、夕焼けのような朱色で染まっていた。

斬魂刀の中で眠っていたはずが、いつ具象化したのか自分でも分からなかった。
基本的に、具象化は死神たちの間で、良く思われてはいないらしい。
刀は刀として存在するべき――　その理屈は確かに、分からぬでもない。
しかし主である日番谷冬獅郎が、氷輪丸の具象化について苦言を呈したことは一度もなかった。
「……いて、かまわぬのか」
「いたらいい」
遠慮がちに問いかければ、穏やかな答えが即座に返ってきたことを思い出す。
外見は幼いとさえ言えるが、器の大きな男だと思うのはこんな時だ。
幸せだと思う、彼の前にひざまずくことを。しかし今……隊首席は、無人だった。

無造作に後ろに引かれたまま放置された椅子に、歩み寄る。背もたれに触れると、まだ温もりが残っていた。
硯に残った墨は磨られたばかりのように見えたし、筆に含まれた墨はまだ、乾いていない。
途中まで書きかけの書類が、机の上に置かれていた。
机の隅に置かれた湯飲みには、まだ温かい茶が半分ほど、残ってい

る。
仕事中、突然呼び出されて席を立ってしまったものか。
それにしても、いつもの主なら周囲を片付けてから席を立つだろうに。
主の不在以外に、部屋に変化はないか。見渡した時、隊首席の背後の刀置きから、斬魂刀が消えているのに気づいた。

おかしい。胸騒ぎがじわじわと、体の奥底から湧き上がってくる。
戦時特例が出ていない今では、斬魂刀の常時携帯は禁じられている。
主が斬魂刀を持ち歩くところを、随分見ていない……それなのに、刀を持っていったのか？
中に宿る、自分を置き去りにして。

背後の窓が、わずかに開いていた。外からは、晩冬の冷たい風が吹き込んでくる。
窓を閉めようと歩み寄り、外に目をやる。木々や建物の輪郭がかろうじて見える程度で、周囲はもう暗い。
宵闇を眺めるうち、不意に悪寒が襲った。
誰かが、こちらを凝視している。瞬間金縛りにあったように、息苦しくなった。

「主！？」
焦りに突き動かされ、窓を全開にする。
途端、冷たい風が吹き通り、隊首席に置かれた紙がぱたぱたと乾いた音を立てた。
今の視線。間違いなく、主のものだった。しかし、返される言葉はない。

身を乗り出せば、窓の外は満月だった。
黒く磨き上げられた鏡のように雲ひとつない空に、月が空の穴のよ

うに浮かんでいる。
氷輪、と呼ぶにふさわしい凍てつく月を見上げた時、再び視線を感じた。
「主！　どこだ！」
しかしその気配は、呼びかけると同時に離れてゆく。踵を返して、歩き出したくらいの速度だ。
呼びかけに答えぬとは、全く持って主らしくない。違和感が頂点に達し、氷輪丸は部屋の中から外へと滑り出した。

心配、しているのか？　気配を追いつつ、自問自答する。
もちろん誰よりも信頼し、命を預けてもいいと思っている。
力でも頭脳でもなく、清冽な魂としか言いようがないものに対し、畏敬にも近い念を持っている。
しかしその一方で、純粋であるがゆえの脆さにも、気づかずにはいられなかった。
記憶を失った自分を救うため限界を超えて力を放出し、直後に気を失ってしまった時のことが思い浮かぶ。
意思が強い反面、その体はまだ未熟すぎた。
腕に抱きとめた体のあまりの小ささに、それを痛感させられた。

まだ開花しきらぬ蕾だというなら、自分が花開くまで護り抜こう。
従者ではなく、時には父のように、時には兄のように。
斬魂刀が主人たる死神に持つ感情としてはふさわしくないが、そう決意していた。

瀞霊廷の外れには、巨大な川が流れる。
まだ冬のように寒い三月上旬の川に近寄るものはおらず、枯れたススキが揺れている以外は、土手は全くの無人だった。

「主！」
土手の上に、見慣れたシルエットを目にし、氷輪丸は足を止めた。
逆立った髪が、川からの風にあおられて揺れている。
隊首羽織が風に吹き上げられ、背中に担いだ氷輪丸の柄が肩から突き出して見えた。
主にその声が届かなかったはずはないのに、放心したように川を見やっている。

その背後に歩み寄った時、氷輪丸はあることに気づいて足を止めた。
……髪の色が。見慣れた銀ではなく、漆黒だったのだ。
一瞬目を疑ったが、確かにその色は黒で、輪郭は日番谷冬獅郎のものだった。
よく見れば、おかしいのはそれだけではなかった。
確かに死覇装と隊首羽織をまとってはいるが、死覇装が純白で、隊首羽織は逆に黒かった。
黒く染め抜かれているはずの背中の「十」の文字が、白い。
まるで主の周囲だけ、色が反転してしまったかのようだった。

無人の隊首席を見た時からの、違和感。それは不吉な予感に姿を変え、胸の中で膨れ上がる。
主だけが写真のように、スクリーンに映し出された映像のように、現実感がない。
「ある、じ」
その肩に手をかけた時、彼はくるりと肩越しに振り返り、氷輪丸を見上げてきた。

途端、悪寒が走った。
黒い髪、浅黒い肌。その瞳はあの澄んだ翡翠ではなく、濁った真紅だった。
「どういうことだ……何者、だ」

短い言葉だと言うのに、声がかすれた。鼓動があっという間に高まってゆく。
「てめえこそ何者だ。こそこそ追ってきやがって」
「な……」
氷輪丸は今度こそ、返す言葉を失った。「何者だ」と言われたのが自分だと気づくのに、一拍の時間を要したほどだ。
魂の分身とも言える自分を忘れるなど、ありえない。
しかしその声は、どこからどう聞いても、日番谷冬獅郎のものだった。
ただし、主は口こそ悪いが、こんな野卑な口の利き方はしない。
こんなに下品に、顔をゆがめたりもしない。

目の前の人物が、主以外の何者かであるはずがない。しかし、主と認めることもできない。
「……馬鹿な。主が我を忘れるはずがない！　我は……」
「面倒くせえな」
主が柄に手をやるのを、氷輪丸は呆然として見た。瞬間、刀を覆っていた柄が音もなく消え、美しい刀身が現れる。
冬の空に浮かぶ月のように孤高で美しい、と評された「氷輪丸」がそこにはあった。自分自身でもある、日番谷冬獅郎にしか許されぬ神刀。
軽々と片手で扱うと、ヒュッと音を立て、氷輪丸の喉元に切っ先を突きつけた。
頼む、悪夢であってくれ。その刃がひらめくのを、氷輪丸はただ見返すことしかできなかった。

2.　もう一人の氷輪丸

次に目覚めたのは、四番隊の病床だった。
目を開けると同時に視界に入ったのは、灰猫とその主の松本乱菊。
飛梅と雛森桃の姿も見えた。
霊圧から探るに、黒崎一護と朽木ルキア・袖白雪もその場にいるらしい。
首をめぐらせようとしたが、全身を襲った痛みに息を詰まった。
「あっ、卯ノ花隊長！　氷輪丸が目、覚ましましたよ！」
氷輪丸と目が合った途端、弾けるように顔を上げた乱菊が、大声を出す。
「大丈夫、ダーリン？　重傷だから、動いたら駄目だよ」
灰猫が心配そうに覗き込んできたが、それどころではなかった。

光る白刃。
自らの血しぶきの中で倒れる氷輪丸を見下ろし冷たく嘲笑った、紅蓮の瞳。
「主はっ……」
無理やりに体を起こそうとするのを、伸びてきた幾つもの手が阻んだ。
振り払おうとした時、手首をがっしりとした掌に捉まれる。
「落ち着けよ、氷輪丸。とにかく寝てろ」
「黒崎……一護」
唇を真一文字に引き結んだ一護が、氷輪丸を見下ろしていた。
我が動きを止めたのを見て、手首を掴んでいた手を離す。氷輪丸は、大きく息をついた。
この全身を貫く痛みが、自分に起こったことが悪夢ではなく、現実だということを知らしめる。
「我は……どれほどの間、寝ていたのだ」

「瀞霊廷の外れの土手で、倒れていたのが発見されたのが、昨夜だ。十三番隊の管轄でな……虎徹三席が発見された」
ルキアが、落ちかけた布団を直しながら、答えた。

「起きてはなりませんよ、氷輪丸。貴方の傷は、人間で言っても重傷。三日間は絶対安静です」
穏やかな声に顔を上げると、四番隊隊長・卯ノ花烈が微笑していた。
「でも、斬魂刀の傷って、死神みたいに病院で治るものなんですの？」
飛梅が背後から卯ノ花に問いかける。彼女はゆるゆると首を振った。
「いいえ。寝ていても少しずつ傷は回復しますが、ここまで重傷となると……主に霊圧を注ぎ込んでもらわねば完全な回復は難しいでしょう。
氷輪丸の場合は、日番谷隊長ですが……」
そこまで言った彼女の表情が曇る。
「主は……」
そこまで言った声が、かすれた。その先を尋ねるのが、恐ろしかった。

雛森が、その大きな瞳に憂いを湛えながら、小さく首を振った。
「私達にも分からないの。……日番谷君は、昨日の夕方から行方不明よ。こんなことが分かれば大騒動になるから、総隊長にはまだご報告は上げてないの。
何人かで手分けして探してるんだけど、まだ見つからなくて……」
再び、頭がくらりとした。

＊＊＊

１５分後。昨夜起こったことを説明した後、病室は重苦しい沈黙に覆われていた。
「あんたを斬ったのが、隊長だっていうの……？　そんな、訳ないでしょ」
乱菊の声が震えを帯びている。雛森に至ってはショックが大きかったのか、口元を押さえて押し黙ったままだ。

信じられないのは、信じたくないのは氷輪丸も同じだった。
日番谷は、記憶をなくした氷輪丸が襲い掛かった時でさえ本気を出せず、結果的に追い込まれたというのに。
自らが傷つくのを気にもかけず、必死に自分のために呼びかけてくれた主が。
今にも牙を剥きそうな獰猛な表情が、脳裏によみがえる。
霊圧は主であったが、中身は全くの別物。この霊圧が、あれほどに凶暴になれるとは夢にも思わなかった。
あの時は、戦うどころではなかった。しかし本気で戦っていたとしても、あの主を抑えられたかどうか……
氷輪丸は、深いため息をついた。

「冬獅郎と、色が真逆だって言ったよな。銀髪は黒髪に、肌の色は黒くて、死覇装が白かったって」
黙って腕を組み、話を聞いていた一護が口を挟んだのは、その時だった。氷輪丸が頷くと、口の中で小さくうなった。
「何か心当たりがあるのか？　一護」
「心当たりっつーか……俺も、俺と色が反転したような奴と会ったことがあるんだ。斬月がいるのと同じ、精神世界の中で」
続けられた一護の話は、その場の誰もが耳にしたこともないものだった。
斬魂刀との対話の中で、死神が訪れる「精神世界」。そこで、彼は

「もう一人の自分」と会ったらしい。
姿形は一護と同じだが色が異なる、その男は斬月と名乗った。
その正体は、主人格である「斬月」とは別に存在する、もう一つの人格。いわば、多重人格である。
主を守り導こうとする主人格の「斬月」とは異なり、隙があれば一護を屈服させ、入れ替わり、己が王にならんと虎視眈々と狙っていたという。
その気性は獰猛にして凶悪。一護も何度も襲われ、かろうじて撃退しているという。

話を聞き終えた後、乱菊が眉間に皺を寄せながら、一護を見返した。
「……でも、それって精神世界の話でしょ？　氷輪丸は現実で、もう一人の隊長に会ったのよ」
「その斬魂刀が今、次々具象化してんだろ」
灰猫が、飛梅が、袖白雪がそれぞれ視線を見交わす。
「斬魂刀の人格が、ひとつではなかった場合……それぞれが、具象化する可能性があると言うことですか？」
袖白雪が柳眉をひそめ、ぽつりと呟いた。

氷輪丸は、無意識のうちに胸に手を当てていた。
斬月の中にいたという、冷静沈着な人格と、それに相反する獰猛な人格。
自分の中にも、同じような感情の分裂はなかったか？
主とそのことについて、会話を交わしたことはない。主が気づいていたのかも分からない。
しかし、全てを殺し、全てを食らい、全ての上に立ちたいと――
そんな狂気とも言える衝動を、感じたことは確かにあったのだ。
その衝動のみを斬り出したとすれば、それはもう斬魂刀でも死神でもない。ただの、獣だ。
自分は獣を、無意識のうちに野に放ったというのか。

「……あれは、主、ではなかったのか」
救いを見つけた気にはなれなかった。
自分を傷つけたあの男が「日番谷冬獅郎」ではなかったとしても、主が今行方不明なことには違いがない。
「……とにかく、日番谷隊長を探すのが先決ですね。氷輪丸を傷つけたのが、もう一つの斬魂刀の人格だと言うなら、屈服できるのは日番谷隊長しかいませんから」
卯ノ花が、静かな声で言うと回りを見回して続けた。
「しかし、一歩間違えば被害が広がりかねません。期限は、今日の日付が変わるまで。
それまでに日番谷隊長が見つからなければ、総隊長にご報告します」
否定することは誰にもできなかった。
もしも「氷輪丸」の力で本気で攻め込まれれば、瀞霊廷に甚大な被害が出ることは間違いない。

「……あたしは、隊長を探しに出るわ」
「あたしも！　流魂街を見てきます」
「とにかく、手分けしたほうがいいよ。あたしたちも協力するから」
乱菊や雛森、灰猫が言い交わし、全員が立ち上がろうとした時だった。
その場の全員が刹那、動きを止める。

「この霊圧……」
一護が、とっさに斬魂刀の柄を握り締めた。
間違いない。氷輪丸に昨夜襲い掛かってきたのと同じ霊圧が、ものすごい速度で瀞霊廷に近づいてきている。
「あれが……隊長じゃない、ていうの？」
松本乱菊が呆然と呟いた。比較にならないほどに凶暴化しているといっても、その霊圧は紛れもなく主のものだった。

「一護っ！　どうするつもりだ！」
ルキアが、飛び出して行こうとした黒崎一護に呼びかける。
「あいつを止める！」
「屈服できるのは、日番谷隊長しかおらぬ！」
「だからって、放っとけるかよ！」
刀を肩に担ぎ、窓に足をかけた一護が全員を振り返る。
「あれが何だろうが、冬獅郎の魂から生まれたってことは間違いねぇんだろ？　だったら、何とかならねぇはずはねぇ。俺は冬獅郎を信じてる」
ひゅっ、とその姿が掻き消える。
「……氷輪丸。あなたは、動いてはなりませんよ」
卯ノ花が、我の隣に立った。そんなことは分かっている。戦おうとしたところで、足手まといになるのが落ちだろう。

一護の言葉が、耳をうがっていた。
日番谷冬獅郎を、信じる。
それは本当なら自分が、口にしなければならない言葉だった。
昨夜の衝撃から、いまだ覚めやらぬらしい。
「頼むぞ……」
信じて待つことしか、できないのか。
氷輪丸は一護の消えていった方角を眺めやり、唇を噛んだ。

3．　日番谷と恋次

「日番谷隊長？　どちらです？」
今より三ヶ月前、まだ冬のことだった。かすかな霊圧を頼りに日番谷を追った恋次は、河川敷にやってきていた。
こちらの方角だと乱菊に言われて追ってきたものの、霊圧探査は苦手なのだ。
こんなに呼んでも返事をしないということは、近くにいないのだろうと判断する。自然と呼び方が雑になる。
「日番谷隊長？　おーい。ったく、あんなにちっこいの見つけられるかよ……」
「ほう。誰が見えないくらいに小さいって？」
うぉう、と思わず恋次は声を上げ、振り返った。すると、群生しているススキの向こうに、日番谷の銀色の髪が揺れているのが見えた。
「ひ、人が悪いなぁ。いるなら返事くらいしてくれてもいいでしょ？」
「何で俺がお前に返事しなきゃいけねぇんだ」
不機嫌さを露にした表情でにらみつけられ、恋次は小さくなった。
まあ、そう言われてしまえば先はない。
「乱菊さんが心配してますよ。戻りましょう」
「たく、心配性だな」
「当然でしょ。あんなことがあったんだから」
地雷を踏むことを覚悟して、恋次は日番谷を見返す。日番谷は微動だにしなかった。
「あんなこと」とは、日番谷が瀞霊廷を出奔した2週間前にさかのぼる。
草冠宗次郎という名の裏切り者に加担したと断定され、一時は処刑命令まで出された身である。

乱菊が日番谷の不在に神経質になるのは、当然のことだった。
「……傷もまだ、完全に癒えていないんでしょ。戻ってください」
「……分かってる。すぐに戻る」
そう言いながらも、日番谷の視線は川面へと向けられている。
恋次は日番谷を急がせるのを諦め、すぐ隣に立った。
「……何故、なんです？」
「何が？」
「どうして、乱菊さんや雛森の元を離れたんです。あんたは瀞霊廷を裏切っても、あの二人は裏切らないと思ってた」
そんなことを聞くのは、不躾だと分かっている。でも、恋次にはぶっきらぼうな口調で聞くことしかできない。

「草冠宗次郎が昔馴染って事は聞いてますが、あの二人だってそうでしょう」
「……それは、」
日番谷は、無理やり考え事から引っ張り戻されたように、目をしばたかせた。
「草冠は独りだったからな」
その答えを聞いて、ハッとした。
もう随分昔のことに思えるが、極囚となったルキアがたった一人、牢の中で背を向ける姿を思い出したからだ。
自分は、その時どう思った？　死神全員を敵に回しても、味方でいたいと思ったのではなかったか。

「そう、ッスか」
そう言って踵を返すと、日番谷の視線が追いかけてきた。
「俺を連れ戻しに来たんじゃねぇのか」
「俺には、あんたにとやかく言う権利はねぇッス。差し出がましいこと、聞いてすいませんでした」

日番谷が裏切ったと聞いても、取り乱さなかった乱菊を思い出す。
それは、日番谷のこの性格を、知っていたからか。
「戻って来てくださいよ、後でいいから」
「……あぁ」
そう返した日番谷の言葉を、まるで昨日のように思い出す。

＊＊＊

――　戻って来てくれと、言ったのに。
広い河川敷を見渡し、恋次は唇を噛んだ。
ひょいっ、と軽やかな身のこなしで、一角が土手沿いの道へ飛び上がった。
辺りを見回すと、ぐんと腕を伸ばして伸びる。後からついてきた弓親と恋次を振り返った。
「ご自分の具象化した斬魂刀が負傷して、日番谷隊長自身は行方不明。一体どうしてしまったんだろうね」
落ちかけた髪を手櫛で漉きながら、弓親がそう言った。一角が溜め息をついた。
「ナリは子供でも迷子なわけねぇし。行き倒れてるって線もねぇだろ。となれば、自分の意思でいなくなったんだろうよ。探して見つかるか？」
「実も蓋もないこと言わないの、一角。騒ぎになる前に見つけないとまずい」
はあ、と恋次は溜め息をつく。思いがけなく荒っぽい響きになり、二人の視線を感じた。
「いや」
弁解するように首を振る。

「なんか……思い出しちまうなと思って。嫌な空気だ」
二人とも何も返さなかった。恋次が何を言おうとしているか、分かったからだろう。
王印強奪事件でも、日番谷は突然姿をくらまし、それが全ての発端となったのだ。
「今度は、一体誰を護ろうとしてんだ、あの人は……」
自分よりも強い者に対して抱く感情ではないが、外見が子供だからかどうも危なっかしい。
また誰かが泣くようなことは勘弁してくださいよ、と心の中で呼びかける。

その時だった。突然出現した霊圧に、三人は同時に顔を上げた。

「日番谷……隊長？」
初めに気づいた弓親が眉を潜める。思わず、三人で顔を見合わせる。
日番谷の霊圧には、間違いない。しかし、血なまぐさいまでの殺気を感じる。
離れていても、殺気が吹き付けてくるような――
「ど、どうしちまったんだ」
とっさに刀の柄に手を置いた一角が、刀を引き抜くこともできず、ためらう。
その瞬間、空気が鳴った。
「なにっ！」
振り向いた時、思いがけないほどに近くに、黒髪の少年の姿があった。
手にした刃を振りかぶった少年がニヤリと笑うのを恋次は確かに捉えた。

地面に打ち当たった刀の剣圧で、岩が砕け、地面が巻き上げられる。
三人は三様に飛び離れ、地面に着地した。そして、土煙の向こうに

佇む少年を見やる。
「ひ、日番谷隊長……？」
恋次の声が上ずった。その霊圧は紛れもなく日番谷のもの。刀も、氷輪丸だということは分かる。
顔も、体格も日番谷に違いない。しかし、銀色であるはずの髪は黒く、
透き通るように白いはずの肌は浅黒く、美しい翡翠を湛えている瞳は、真紅だった。
少年は、絶句した三人に順番に刺すような視線を向けた。
「あ？　てめぇらこそ、誰だ」
「だ、誰だって……」
一角が絶句する。

「日番谷」は、戸惑いを隠せない三人を見やると、ニヤリ、と笑みを浮かべた。
「互いに誰だろうが関係ねぇだろ。……俺はてめぇらの敵だ」
向けられた氷輪丸の切っ先に、本能的にまずい、と察する。刀を引き抜いたのは、三人同時だった。
直後、「日番谷」が突っ込んでくる。
「よく分からねぇが、このままじゃ殺られる。行くぜ！」
いち早く一角が、続いて弓親が始解する。

「日番谷隊長っ！　僕達の声が、分からないんですか！」
金属音と共に「日番谷」の刀を打ち返した弓親が叫ぶ。
一歩下がった場所にいた恋次からは、「日番谷」の笑みが深まるのが見えた。
それは、明らかな愉悦。吹きつけるのは殺気。戦いを、楽しんでいるのか。
「分からないなら……」
弓親が刀を横ざまに振り払う。突っ込んできた「日番谷」の胴を狙

った。

「日番谷」は受けようとも、避けようともしない。逆に体勢を低くする。

左から迫った弓親の刃が、ちょうど「日番谷」の顔の位置に迫る。

「……っ？」

刃が当たる、そう思った瞬間、恋次は反射的に目をつぶった。

噴出す血しぶきを予想した時、ガキン、と鈍い音が河川敷に響いた。

「なっ……」

弓親が絶句していた。横薙ぎの刀を、「日番谷」はあろうことか、その口で受け止めていたのだ。

唇の端が切れ、真紅の血がひとしずく、落ちる。ニヤリ、と刃を噛み締めた口角が上げられた。

ピシッ、と音を立て、弓親の刃にヒビが入る。そのまま幾つもの破片になり、地面へと落ちた。

「嘘だろ……？」

弓親が刀を捨て、背後に飛び下がる。しかし突っ込んできた「日番谷」の勢いが勝った。

放たれた蹴りが、弓親の腹にまともに食い込む。弓親は、悲鳴も上げられず背後に吹っ飛んだ。

吹き飛んだ弓親を見やり、一角は信じられぬ、と風に引きつった笑みを浮かべる。

「……そんなに歯が丈夫とは知りませんでしたよ、『日番谷』隊長……かどうか、分かりませんけど」

「日番谷」が軽い足音と共に地を蹴るのと、一角が槍を手に突っ込むのは一緒だった。

肌がビリビリと震えるような裂帛の気合と同時に、「日番谷」に正面から穂先を突き出す。

「日番谷」は切っ先を下にしたまま、右に刀を払った。
紙一重で掠めた槍の穂先と、刀身がこすれあい、火花が飛び散る。
双方、引かない。「日番谷」が切っ先を上に斬り上げる。
「一角さん！」
見ていた恋次は思わず叫んだ。右腕と肩の部分の着物が裂け、血がにじむ。
「……効かねぇ！」
一角は顔をしかめながらもひるまず、更に前に出た。「日番谷」の肩を掴み、背後の岩に叩き付けた。
「日番谷」はわずかに眉間に皺を寄せたが、痛みを感じているようには見えない。

「捉えたらこっちのもんだ。大人しく……」
一角が「日番谷」を見下ろした瞬間、その肩を掴んだ一角の左腕が凍りついた。
「……霜天に座せ、氷輪丸」
解号と同時に、一角の全身があっという間に氷に覆われる。
「やめてください！　息が……」
恋次は思わず叫んで、駆け寄る。一角の表情が苦悶に歪んでいる。
氷漬けにされては、息が出来るはずもなかった。

もはや、ためらっている猶予はない。恋次は心を決め、蛇尾丸を手に「日番谷」に突っ込んだ。
「何をしてるんですか、あんたは……」
あんたは、誰よりも仲間思いのはずじゃなかったのか。それなのに、なんでこんなことに。
理不尽な思いを、解号に込める。
「吼えろ、蛇尾丸！」
いくつもの節に分かれた巨大な蛇の頭が、「日番谷」に迫る。

振り向いた「日番谷」の反応は早かった。
「氷輪丸！」
水と氷で出来た巨大な龍が、その刃から噴出す。
次の瞬間、真っ向から蛇尾丸と氷輪丸が打ち合った。

「……蛇が龍に勝てるか」
粉々に砕け散ったのは、恋次の蛇。
氷輪丸がその鎌首をもたげ、恋次を狙う。刀を失った恋次は、ぎり、と唇をかみ締めた。
どうして、外見が日番谷と異なっているのかは分からない。
しかしソウル・ソサエティで、氷輪丸を使えるのは日番谷冬獅郎しかいない。

「……『日番谷』隊長」
恋次の呼びかけに、「日番谷」はようやくまともに、彼を見返してきた。
その紅蓮の瞳に、ぞっとする。
「なんでだ……一体、どうしちまったんスか！」
必死の恋次の問いかけに、日番谷は答えない。代わりに、ずい、と歩み寄った。
「『日番谷』隊長！」
ペッ、と口に入った血を、吐き捨てる。

と同時に、その姿が掻き消える。首をめぐらせた時には、その小柄な姿が恋次の懐に飛び込んでいた。
「うっ！」
右腕に衝撃が走るのと、ぼきっ、と嫌な音がするのは同時だった。
「日番谷」が目にも留まらぬ動きで繰り出した蹴りが、自分の腕を折ったのだと気づいたのは、激痛が腕を襲ってからだった。

「……つまらねぇ」
「日番谷」は、ずっとそのことを考えていて、突然思い出したように言った。
そして、倒れた弓親、氷の中でもがく一角、腕を押さえて飛び下がった恋次を順番に見やる。
「全然食いたりねぇ、お前らじゃ」
そう言って、氷輪丸を大きく振りかぶる。
一撃が、来る。恋次が逃げるか戦うかためらった時、「日番谷」が不意に顔を上げる。
刹那、巨大な斬撃がその場を切り裂いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1237m/

DOUBLE MOONS

2010年11月2日13時45分発行